

晴天。縁側。桜花の蕾。

「しかしまあ。文書主義と云う物は面倒ですなあ。まあ、古文書とかを尊ぶ人間が言へる言葉ぢやないけど」

「さうですね。でも、私には此処迄新しい時間の過ごし方が開けましたから」

「ですな。どうでしたか」

「難しいことも多かつたけれど、それ以上に色色な人の心を覗き見ることが多かつたから、それがどうも印象に残つてて」

「長い間、我々もどうにもできず、申し訳ございませんでした」

「仕方ないわよ。だから、此処迄が本当に楽しかつたし、逆に苦しいことも」

「人間と云う物は、恐ろしく複雑化しております。人間は独自の高度社会を作つた。心も同じです。嘗て誰がここまでの発展を想像しましたかねえ」

「上もさぞ驚いているでせうね」

「左様ですな」

茶を飲む少女と男。カラ、と氷が姿勢を変える。

「……短いけれど、一旦此処を離れるのね」

「御家族はさぞおどおどしておられるでせうな」

「心配し過ぎよ。今の私の立場を考えれば、至極当然なのよ、此方ぢや。さういう處も理解して戴きたいのに」

「本来は接点なぞ無いはずでございますから、致し方なしです」

「金銭面とか、物品はどうすればいいの」

「前者につきましては「心配なく。後者につきましても」用意できますが、思うにあなた様ご自身で選

んでいただいたほうが宜しいかと」

「良いの？」

「勿論でございます。ただ、従者を付けて頂くことが条件ですが」

「何にも問題ないわ！ 早速行きたいのだけだど！」

少女が勢いよく立ち上がる。

「承知しました。諸々の手続きは済ませておりますので、気兼ねなくお出かけください。いま従者を呼びますので」

「ありがとうございます！ 私も準備してくるわ！」
ドタドタ。

「……幸せですな、本当に」
縁側を立ち上がる男。内線を掛けに行く。

蕾が今にも弾けさうである。

「大村くーん。新人さん来たから色々教えてあげてね」

自分の首元くらいまでの背丈の女の子がテンチヨ一の横に立っていた。名札はあだ名で書いてある。

リョーコ、とだけあった。

こういうチェーン店の居酒屋に働きに来るような人っぽい雰囲気はあった。けどそれとは真反対の名札のシンプルス。化粧っ気も薄い。

「雨野リョーコです。何卒よろしくお願いします」
律儀だ。こゝも丁寧挨拶されては頭を下げずにはいられなくなる。

僕の担当である洗い場を一緒にすることになった。飲み込みが恐ろしく早く、半月ぐらいで、効

率も、終わったあとの綺麗さも圧倒的に彼女の方がよくなっていた。

「あの子の飲み込み、すごいですよ」

テンチョーにこう話したことがあった。

「頭いいらしいからねえ。だからかもね」

某大学の神学部にいるらしく、学部内随一の頭脳らしかった。

「ああ……道理で……」

神学部の噂は何度か聞いたことがあった。学生の数はとても少ないが、その分頭脳明晰な人材しかいないらしく、近づきづらい雰囲気を出しているらしかった。その大学に通ってる腐れ縁の脳筋曰く、「らしいやつを見た事はあるけど怖くてな。来るんじゃないねーよ、みたいな雰囲気出てた」らしい。

そんな時に、バイト先で件の神学部の子が来た。あつという間にスキルを身につけていった。接客も任せられ、客にも愛くて優しい、いい店員さんとして知られるようになった。預言通りには進んでいった。

「正式な店員にならないか、って言ったのよ」

テンチョーが一昨日休み時間に話しかけてきた。いわく、スキルももう十分身につけたから正式な店員にならないかと聞いてみたらしい。すると困り顔になって彼女は、

「申し訳ございません。そうするわけには行かなくて……」

半月後に家族関係の都合で実家に戻らねばならず、今月いっぱい辞めなくてはならなくなったらしい。お店が終わったあと、泣きそうになりながら

テンチョーに事情を説明してくれたそう。

「予め言ってくれるなら大丈夫だよ、って何度も言っただけだねえ。ごめんなさいって何度もね。いやあとっても優しい子だわあ。ああやっぱ辞めてほしくないけどなあ」

同感だった。家族の事情だから致し方ないとは思いつつ、こうも仕事が上手くて積極的な人はそうそう来ない。短い期間だったけど、仕事で助けてもらった事は正直数知れずだった。

「せめて最後までいいお礼しません？」

「そうだね。食事に行こうか」

そんなわけでテンチョーと僕とリョーコちゃんとして、二人の定期圏内にあるパスタの美味しい店に行くことにした。店はリョーコちゃんが希望したお店だった。

ジェノベーゼ、ペペロンチーノ、まりな（注一）。机上の皿、銀色のフォークとスプーン。まりな（注一）のあった皿は大変綺麗で、その上に綺麗なカトラリー一式が整列している。

「美味しかったですね」

微笑するリョーコちゃん。首には白色の紙が丁寧にかけられていた。染みの一滴も見えない。

「そうだね」

「よくこんな美味しいお店知ってたね。俺の定期券でいつでも行けるところなのに全然知らなかった」

「だいぶ前に美味しいって聞いていたんです、友人から」

「同級生とか？」

「はい。同じ学部の子から」

「最近の子達ってグルメね」

テンチョーが呑気に言う。妙に麗しい装いで今日は来ている。

「ランチが安いんで、多分それで知ってたんだと」

「定期券内でこういうのがあるのいいよな。あ、でも学校からも近いよね」

「はい。歩いて五分くらいのところですよ」

「いいなあ。こちらら学校の周りにこんないい所ないよ。せいぜい家系ラーメンとか牛丼屋はつかで」

「え、大村くん好きじゃないの？」

「昔から胃が弱くて脂とか、がつつくのダメで」

小学生の時の給食ですらかつこんで胃を悪くしたことがある、と言えは察してくれるだろう。

「男の子ってそういうの好きそうだと勝手に思ってたわ」

「別に男の人だからって脂多めでも大丈夫ってわけじゃないですよ、ねえ」

リョーコちゃんが庇ってくれた。肯いたけど、本当に申し訳なさしかない。

嘆息。

……昔から、なよなよとしていって言われ続けていた。最近までは、別にそうしているところ何ら問題もなかったからどうしようも勝手じゃないかと思ってきた。だがここ数年でいろいろな人に出会った。堂々としていっている人間ばかりに会った。

目前にいる二人も然りだ。若二十を前にして完全に厨房を委ねられ、てきぱきと指揮を執ってしまつたリョーコちゃん。わずかな期間で熟練になつてしまつたリョーコちゃん。ああ、肩身めっちゃ狭いな、と思わずにはいられなかった。

自己嫌悪。

またかよ。すつごく悪いことだ、つていうことはとつくに気づいてて、学校にいた頃にはスクールカウンセラーに何回か相談したこともあった。

「ポジティブに何事も捉えるようにしてみようか」

——それができたら今ごろ苦労してない。

「趣味を持つてみようよ」

——昔から多趣味つて言われてるんだよなあ。

(楽器も少しだけど弾けるし、本を読むのも好きだった。科学雑誌もたまに買って読んでいたこともあった)

結局カウンセラーの言葉が参考になることは一度も無いまま高校を卒業した。他人をあてにしても何も変わらないならいつそのまんまでいいや。そうやってここ数年はいたけど。

「ちよつと大村くん」

はつとする。セットのデザートが目前に出されていた。イチゴのアイス。半分溶けかかっていた。「食べないんですか？」

リョーコちゃんが不安そうな目を向ける。

「あ、ごめんごめん。ちつと考え事してて」

忘れよう。こんなこと考えるのはやっぱり馬鹿馬鹿しい。

目今のピンクい固体と液体の混合物を丁寧に匙で掬って、口元に運んで行った。冷涼さと、生ぬるさが、えも言われぬ感覚が、暫く抜けなかった。

あのあとすぐ、リョーコちゃんは実家に帰っていた。常連はものすごく寂しがっていた。

「実家に帰るんじゃあ仕方ないかあ」

と言われれば、

「止めてくれよ、なあテンチョー」

という声もあった。

「まあ、寂しがってくれてるつてことは、本当にいい子だったつてことだし。でも、もういないものはいないからね。私達だけでやってくほかないから」

洗い場は伽藍として、もの寂しさばかり溢れる。

新しいバイトの子は、リョーコちゃん以降、誰も来なかった。でも正直なところ、その方がかえつてよかったように感じていた。

そんな折、リョーコちゃんからのメッセージが、突然やつてきた。

——先輩すいません。ご無沙汰しております。

——国松涼子です。バイト先では大変お世話になりました。

突然なんですけど、此方に帰ってきてから少し問題が起きておりまして、相談に乗っていただきたいのですが、お時間ございますでしょうか。もしよろしければ直接お会いして話したいのですが……

リョーコちゃんが帰る前、バイトしてた時にも、時たま学校とかひとり暮らしの相談は受けていた。本人曰くコミュニケーションが本当に苦手で、大学の友人は一人か二人だったらしく、バイトに来ていたのは寂しさを紛らわそうとしていたことも理由だったらしい。

「何かあったの？」

と返す。

——実は、

——相談したいこと、つていうのは

——実はまだ誰にも言つてなくて

——前に大変お世話になった先輩にならご相談できると思つて

もつと深い仲の人に言うべきではと思つてしまった。確かにバイトで一緒だったのは事実だが、現時点でもものすごく深刻らしいその問題を相談する相手として俺は果たして適しているのか。要らぬ葛藤が頭を巡る。

「それだったらテンチョーの方が良いんじゃない？」

と打つて返す。

——テンチョーさんでもよかつたんですけど

——連絡先変わったらしくて、どうしようもなくて

——そういえば最近機種変をして、電話がかかってくるのがあった。LINEも引継ぎが出来ず、新しいアカウントにしたと伝えてきていた。一瞬アカウント教えようか、と言いかけて、本人が嫌と言つてのに教える馬鹿が居るかと言われた。

「じゃあ、俺でいいなら話聞くよ」

と返す。

——本当に有難う御座います

——それじゃあ日程お伺いしてもよろしいですか？

か？

結局、三日後の土曜日に瀬戸珈琲店という俺もリョーコちゃんも行ったことがある喫茶店で会うことにした。

奥まったところに店があるからか、相変わらず人の入りは少なかった。彼女は紅茶のゴールデン・ブレンドの濃い目、僕はモカマタリを頼んだ。

「ごめんなさい。突然ぶしつけに」相談なんて」

「気にしないでいいよ。でも、誰にも言えない相談の相手が、僕みたいな人で大丈夫かな？」

「こういうこと連絡できそうなのが先輩位しかいなくて。LINEの友達も先輩告めて十人ちょっとしかいませんし」

「そっか。でも相談してくれたの、嬉しかったよ」

「よかった」

久しぶりにリョーコちゃんの微笑が見られた。思い詰めているような姿を想像していたから、まだ僕が思っているよりも深刻な話じゃないのかな、と思つた。いやいや、樂觀視しすぎるのは良くない。しっかりと聞いてあげないと。

「お待ちせしました」

ポットカバーに入ったゴールデン・ブレンドとモカマタリが届いた。

「……それで、相談っていうのは」
カップに丁寧に紅茶を注ぐ彼女が、すこしびくついていた。

「あ、そうでしたね」

ティーカップを口元に持って行き、少し啜る。澄んだ紅。ソーサーにカップを戻す。口紅の真紅。

「先輩」

「ん？」

「先にこれだけは言っておきます」

「え？」

「私、カミサマなんです」

：事の顛末はこうだ。

リョーコちゃんは実は神様で、この地に遙か昔に降り立った。しかし目的の神同士の話し合いが終わったことに気づかず、ひとり居眠りしたままだった。

気づけば周りには誰もおらず、果てには高天原（注）にいたはずがこの世界に降りていた。しかも帰る方法を知らなかった。困り果てた彼女は人間になり、いろいろな伝手で件の大学に進学し、大学生になっていった。

想像以上に生活が気に入っていたし、上手くもいつていたのだが、先日ついに高天原の人々に見つかり、帰るように言われた。だけど学校を中途半端に終わりとくはないし、他にも心残りが無いわけもなく、来年の三月まで戻るのを引き延ばしてもらった。したいことがまだまだたくさんあり、その相談に乗ってもらいたかった、ということだった。

「え、リョーコちゃんが神様っていうのは本当なんだよね」

やっぱり疑ってかかってしまう。

「う、疑いますよね……いやでもこれは本当の話で」

証拠に、古写真を出された。見るからに古かったが、被写体は明らかに彼女だった。江戸末期に撮ってもらったという。

「つまり、遙か古代から今までしっかりと生き続け

てきたってことでオーケー？」

「そうです」

自分の中のCPUが壊れたような気がした。思考停止にまで行きそうだった。

世話をしてくれた伝手、というのは神道につく一族であり、世代を超えてリョーコちゃんを守ることにくれてくれたという。

「その家系のおかげでこれまで生きてきた、つてことだけど戸籍とかもあつたわけでしょ。学校とかはどうしてたの？」

「もともとは、イキガミとして人に非ざる存在としてなんとか戸籍とかの問題を避けていたんです。けど……」

最近はそのような融通が利かなくなりはじめたため、やむなくリョーコちゃんは身元不明者として一時的に扱われ、代々守ってきた一族が正式に引き取ることで解決したという。ちよつと何言ってるか分からない。

「学校とかにはそのあと通い始めました」

戸籍は六歳で登録した。リョーコちゃんの希望で義務教育を受けることにしたからであった。一族からも、

「普通のヒトの生活を経験するのもいい事です」

という声が多かつたらしく、早速通うことになった。

言うまでもないが、基本的な知識や考え方は既に持っていたし、歴史も生で目撃してきたものもあり、成績は自ずから優秀だった。ただ、高校に入ってから理系科目に難儀した。数学は高度化し、理科科目は聞いたことのないものばかりで、ちんぷんかんぷんだった。一方現代文然り、古文とか日本史は自

分の見てきたもの、読んできたものがそのまま字引となり、群を抜いて優秀だったらしい。

「まあ、当然だよね……日本史なんて、どれも経験してきたんでしょ？ そりゃいやでも用語だとか考え方を覚えてる、というか知ってるよね」

「そうですね……」

文系へ進んだ彼女は、かつて自らがいた神の国を知りたくて、例の神学部への進学を希望した。成績は十分で、すんなりと進学。そして自分のお金が欲しかったので、この前のバイトに至る、という事だった。

「つまりタカマガハラ、だっけか。そこへ戻る前にヒトの生活が覗いてみたくてこれまで生活してきた。けどついに迎えが来たから終わりが見えた。こういうことでいいんだよ」

「はい」

「……それで」

「はい？」

「相談っていうのは、なんだろう」

「あ、そうですね。本題に入りましょう。先輩、このあと数日間お休みとかありますか？」

「え？ あ、まあ夏休みまだあるし、バイトも入っていないから大丈夫だけど」

テンチョーのところでの居酒屋のバイトは一旦休みをもらっていた。元々課題とかのための休みにするつもりだったが、思いの外課題の量が少なく、終わりのめども立っていたから、別にこういう消費をしてもさして問題がない状態だった。

「あの、二人で出かけませんか？」

「啞然とした。」

「え、いや、待つて待つて。リョーコちゃんいいの？ こともつと、いい人とかいるんじゃない？」

「え、どうしてです？」

「ほら、例えば大学の同級生とか。そういう人の方が気どころ知れた人同士だからなおさら楽しいかなあ、と」

「あの、そういう人こそが先輩なんですけど……」

「……え、え」

すなわち、僕はリョーコちゃんに先輩として慕われていたのか。自分としてはあくまで「バ先の先輩と後輩」だったのに。あくまでその関係であって、出かけるとかそういう類いのできる様な続柄じゃない。

でもこうやって彼女は僕を頼って連絡してきて、秘密まで打ち明けてくれた。そもそも神様だつていう事を明かすこと自体ヤバイ(自分の語彙力を恨むもう少しいい方あっただろうに)。

だよな？

こんなに頼られてるのに、何もしないのはやっぱりだめだ。ほら、踏ん切り付けて進めよ、漢。

手元のモカマタリのカップを置く。

「わかった。じゃあ、どこへ行きたいの？」

「リョオコさん」

呆けから覚める少女。おどおどと周りを見廻す。

「気分悪さふだけど、大丈夫？」

「あ、気にしないで下さい」

「そっか、よかった」

「あと先輩」

「なんだい」

「あんまりさん付けはしないで、下さい」

「え、否でも」

「先輩は先輩です。だから今の私は先輩にとつて、リョオコちゃんです。気を遣われるのは、正直好きぢやないの？」

「あ、ごめん……」

車窓。熊本駅を出たバスは順調に進み、阿蘇山の麓を走る。数年前の大地震で通行止めも多数有り、山肌の一部は崩れ、茶色を帯びてある場所も在る。「此処いらもまだ修復が終わらないんだな」

「直るのにはもう何年も掛かるらしいですね」

「早く元通りになつてほしい、つて願ふのはエゴなのかな」

「え？」

「いやさ、最近ぢやボランティアで直接支援することも多いだろ」

「さうですね」

「でも俺さ、億劫になつてさういうの出来なくてさ。黙禱するし、関係するノンフィクションとかを読んだりしてるんだけど、やっぱり直接行くのが良いのかな、つてさ」

買った缶珈琲の飲み口へ目が落ちる。

「願ふことは、直接的には届かずとも相手を意識化するという点では同価値かなと思えますけど」

「え、ええと、つ、つまり？」

「黙禱するにも、本を読むにも、被災者の方々をお思つたり、記憶し続けやうとする。さういう心が先輩の中に在りますよね。相手には見へずとも、たとえ先輩の最期まで、其の心が相手に知られなくても、

私はさうすること自体が、何かしらの、または誰かしらの救いに何処かで変化して届いてゐると思ひます」

天を仰ぎ、そのまま首を窓の方に回す。次第に、外で流れ行く工事現場を眺め始めた。

「……心に留め置くことでも救へる、か」

一瞬、何かを言ひかけ、躊躇う少女。胸元を少し擦り、深い息をつきながら椅子に深く座り直す。

「……流石の神学部出身、いや神様だよな。俺の頭ぢや消化しきれないや」

「考へ方は、時間を掛けて咀嚼するものですよ」

「さうかあ……」

「あと、」

「ん？」

「今はカミぢやないですから」

「あ、ごめん」

「いいんです。気にしないで下さい」

少しだけ、先輩は鼻で深く息をつき、体を緩ませた。目を瞑り、先程以上に深い思考に落ちていかうとした。

「先輩」

呼び止められ、ささと姿勢を正す男。

「此れ、重いですけど持つて貰えますか」

「あ、わかつた」

黒色の鞆が渡される。想像以上の重さだったのか、

粗い息遣いをお互いに漏らしてゐた。

「いや、こんなに長いとは」

最寄りのバス停、宮交バスセンターに降り立つたのは良いものの、其処から三十分も歩かなくてはな

らないのは、事前に知つていたにしてもやはり疲労を感じずにはいられなかつた。

「やつと着いたね」

「さうですね」

此の場所に来るのは幾度目だらふか。私の、始まりの地。

「前々から話は聞いてたけど、やつぱり直にくると違ふな」

「先輩、此処の辺りに所縁でも？」

「大したものじゃないけどね。遠縁の親戚が此処の辺りに居るのは聞いてただけど、確かね……ええと、母方の、父親の、その復た母親の兄妹が住んでるらしくて」

その人たちが俺はだう呼ぶべきなのかな、と呟き乍ら頭を傾げる先輩。

「あとで会いに行くんですか？」

「いや、別にさうぢやないけど。さういへばそんなこと聞いてたなあ、てさ」

「会いに行くのが良いと思いますよ。縁遠い人達を大切にすることも大事だと思ひますし」

「……それもさうだね」

先輩の朗らかな表情。私の本望。

「ぢや、行かうか」

「はい」

「この地に、古くより根付いております当神社の所以を、まず簡単に説明します……」

神社の周回ツアーなるものに参加しているわけだが、個人的にはリョーコちゃんの方がよく知ってるんじゃないかと思う。

「こちらの木は、オガタマノキと申します、当神社の御神木であります。こちらの木には、天岩戸のお隠れにられました天照大神を外に出すため、天岩戸の前でアメノウズメが舞を舞つた際、持つた枝がここから取られたと伝えられております」

横を向く。リョーコちゃんの表情が妙に固かつた。

「それでは皆様、これより天岩戸を二拝観いただきます。神社への参詣がお済みでない方は、参詣いただけますよう宜しくお願いします」

リョーコちゃんの表情は、ますます固い感じになつていく。

「だ、大丈夫？」

「あ、大丈夫ですよ。すみません、なんとなく故郷に近づいてるんだなつて感じて」

そうだよな。彼女にとつて、ここは故郷につながる一つの「路」なんだよな。多分、リョーコちゃんももし彼方に帰るとき、もしかしたらここを通るのかも知れない。だから、感慨に浸るのも至極当然なのだろう。

「それでは皆様。只今より、天岩戸への参詣に向かいます。先立ちましては、こちらにてお祓いをいたします。皆さまにおかれましては、頭を下げて頂きますようお願いいたします」

「ありがとうございます。それではこれより、天岩戸の方へと、ご案内いたします」

……この時見たものを語ることは、正直できない。太古の昔、国生み伝説に端を発する日本神話の大きな舞台のひとつであるこの地は、得も言われ雰囲気にも包まれ、今も、見たものの記憶に、思つたことに、

もやが掛かっつてずっと晴れない。

「先輩」

リョーコちゃんの声で、意識が引き戻された。

気づくとツアーは終わり、最終地点の神楽殿の前にいた。

「大丈夫ですか？」

「あ、うんうん。大丈夫大丈夫」

なんで(今もだけれど)天岩戸を見た時の意識は曇がかったているんだらう。見たことそのものは確かなのに、いざその蓋を開けようとすると、どうにもできなかった。この時も、今はとりあえず、という形で思い出すのを諦めて、リョーコちゃんが周辺を見て歩きたいというので、一緒に行くことにした。

喫茶店。珈琲のカップが男の目前に置かれており、少女は紅茶の檸檬入りを啜る。

「かういうお店、好きなの？」

「はい。観光地も基本的に人々の棲まう處ですから、こんなお店が在るはずですし、地元の人に愛されるお店の雰囲気、好きなので。と言つても、本当に訪れたのは、初めてなんですけどね」

「さうか。今迄出掛けるなんてなかなか出来なかつたもんね」

「はい。だから嬉しいんです」

珈琲を啜る男。少しだけ表情が緩んだが、一瞬で牙えが消える。

「……あのさ」

「はい？」

「俺で、よかつたの？」

「え？」

「ほら、かういう風に出掛けるの、初めてなんだらう。もう少し気心知れた人、例へば同じ学部の子とか、中高の同級生とか、さういう奴らとかと一緒の方が良かったんじゃないかな、って」

「先輩」

「ん？」

「私は、其の中から先輩を選んだんですよ？」

「え、本当に」

「はい」

即座に返答する少女。

「し、正直に？」

「はい」

再び即座な返答。

「おお……」

目を瞑り、座位で背を反らす男。姿勢が戻る。

一瞬、俯く男。また、背を反らす。

「……どうして」

「何ですか？」

口元が動いた。すつ、と姿勢を戻す。

「いや、何でもないよ」

「あ、さうですか」

にこやかな少女。

「ぢやあ、行かうか。次の處」

「はい！」

沢を歩くのは、子供の時に行った奥入瀬溪流以来だった。清水が濁ることなく、けれど力強く流れ行く。足元の舗装は水気を帯びて黒々とし、苔むしたところもある。リョーコちゃんが、——歩くところあるので、トレッキングシューズと

かできた方が良いでしょう

って、連絡をくれたから、足元の不安はなかった(まあ、そもそもバス停からここまで来る時点でこいつの有効性を存分に見せつけられたけど)。

平日に来てるものだから人はまばらで、行き違う人も大半は高齢の夫婦ばかりだった。それも自分たち以上に、トレッキング用のしつかりしたウェアを着ている用意の良い人たちがばかりで、実際川辺は気温が低くて、肌寒かった。上着の一枚や二枚、せめて羽織るぐらいの頭も無かったことを後悔する。

頭の中でそんなことを考えながら歩く。橋でリョーコちゃんが立ち止まっていた。隣に入る。

「綺麗ですよ」

橋の下で、支流が流れ込む。細い岩の狭間を通り抜けようと、透明は白くなって勢いを増して、そして本流に溶け込んでいく。

「なんか、母親を見つけて、飛びつく子供みたいですよ」

「つていうと？」

「ほら、子供つて親とはぐれると勢いがなくなつて立ち尽くしたりしません？」

「ああ。それで泣き出しちゃたりしてね」

「でも歩き始めて、親の姿を見つけたら一気に駆け寄つていくじゃないですか。ここの支流も、最後は一番勢いをつけて本流に流れ込んでるので、なんとなく被るなあ、って」

「……」

やつぱりリョーコちゃんの頭の中は、僕なんかよらずつと密度の濃くて、色彩が溢れる世界なんだと思う。ぼくなんかより、ずっと。

ぼくたちは遊歩道を歩き続けた。道からは、次第に人の足々が消えていった。リョーコちゃんの歩きが思っていたより早く、距離が自然と開いてしまふ。時たま自分も早歩きで追いつくのだが、結局一三分分もすると結構な距離をつけられてしまふ。

「あ、先輩ごめんなさい」

「いいよいいよ」

それを繰り返すうち、広い河原へと出た。

単に河原、とっていいのだろうか。巨岩の削り貫かれた奥に色合いの落ちた祠が建ち、そこまでの小径の両脇は、数え切れない小石の積み上げが迎えていた。

「いつからかわかりませんが、参拝者が信心から作り始めて、今こういう風に残っているらしいですよ」

「ここに来た人たちは、カミサマを見たのかな。だから、こうしてるのかな」

「実際に感覚に訴えがあってもなくても、心の中で感じたものがあつたことは、確かだと思います」

「目に見えるリョーコちゃんが言うのと、説得力があるような無いような……」

「あ、そうですね」

少しの沈黙。

……笑いが込み上げてきた。

リョーコちゃんも、表情が緩んで、一緒に笑う。いつもの冷静な彼女とは違ふ。本当にかわいい女の子。それ以外の何ものでもなかった。

「あーあ、すごく笑っちゃいましたね」

「こんな敵かな場で、いいのかな」

「カミは人の幸福ほど見るに楽しいことは無いと知っています」

「ヒトも一緒だよ」

「ですね」

改めて、周りを見渡した。相変わらず人影は見当たらず、清流と微風の音だけが鼓膜を打っていた。

「先輩」

「なに？」

「写真、撮ってもらえませんか」

「おお、撮ろうか」

「あの、実は」

「え？」

「先輩に持たせてたカバン。中身カメラなんです。肩の重量を一気に軽くし、重みの中身を確認した。写真家が使うレベルの一眼レフが入っていた。

「お、俺使い方わからないぞ……」

「あ、お教えしますよ。そんな難しくないですから」

わざわざ近くに来て、二、三分で教えてもらった。最近のモデルは操作が分かりやすいのに細かい調整が利くらしく、先輩でも良い画撮れますよ、と言われた。

「よし、これでいいかな」

「先輩、準備できましたかー」

「おう」

ファインダーを覗く。フラッシュをオンにする。ぶれないよう、落ち着く。深呼吸。

「先輩！」

シャッターを切ろうとした右人差し指がボタンから離れた。

「ここまでありがとうございます」

「どうしたよ急に」

「ここまで来れば、もう思い残しも無いので思い残し？」

「綺麗に撮ってくださいね」

シャッターを切れ。

閃光がカメラから発射される。
内部機構が被写体を捉え、電子情報として保存する。
シャッター音に一瞬両目を瞑る。

再びの、清流と微風の音。
目を開ける。

被写体の祠と積み石は何も変わらない。
顔を写真機から剥がす。

周囲を慌てて見廻す。

今度は、写真機の画面に顔を落とす。目を見開く。
表情の強張りが、解けていく。

「さうか。君は、此処には戻るために。さうか」
微笑。

「元気にしててね」

首から写真機を掲げ、男は帰路につく。

「ヒトのクニは如何でしたかな」
「混沌としてゐたけれど、幸福にも満ち溢れた處だ
つたわ。私、あのクニが好きだわ」

川の流れば、踊り子となつて彼を見送る。
微風は溪流沿いの岩肌を包む。
幾千年をかけ、其の姿を変えようとして。

・注一

マリナーラは、イタリア料理でよく用いられる
トマトソースの一種。材料がトマト、ニンニク、
オリーブオイル、オレガノ（欧州の地中海沿岸地
域原産の香辛料の二の四つが基本であり、比較
的シンプルで、あっさりとしている。

語源はイタリア語の「船乗りの」という形容詞
から。魚介や肉類などの腐敗しやしい食材がない
こと、調理を受けたトマトの強酸性などによる腐
敗しにくいことが、長期の航海を行う船乗りが食
べるのに適していたことが由来の一説とされる。

・注二

『古事記』などの日本神話において、天照大御
神をはじめとした天津神（高天原に住む神の総
称）の住む場のこと。

『古事記』によると、高天原が天上にある天上
界なのに対し、人々の住む国は地上に在り「葦原
中国（あしはらのなかつくに）」と呼ばれ、有名な
「黄泉国」やオオクニヌシの神話において、オオ
クニヌシが生太刀・生弓矢・天詔琴を持ち帰ろう
として誤ってスサノオを起こしてしまう話など
が残る「根の国」は地下にあるとされる。

尚、読者におかれては天岩戸伝説を一読されたし